

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (260)

八行音

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところで話しています。

「そう。ヒとヒャヒュヒョは、舌が平たくなって上あごに近づくし、フは口笛を吹くときのように唇を尖らせる。ハヘホは喉の奥のほうを狭める。注意深く観察すると、へは母音のeに引かれるせいか、ハホほど奥ではないのよね。」と、おばあさん。

「万葉集のころの八行は、ファフィフフェフォだったって、聞いたことがあります。」

「そう。今のフと同じだったのね。」

「そうか。フが昔のフと同じなんですね。」

「その前、記録には遺されていないから想像なのだけど、原始日本語では、八行音の子音はpだったようなの。沖縄には、花をパナ、星をポティっていう離島があるんですって。文化の中心地から離れたところには、古い時代のことばが遺るといふのね。」



古い時代のことばが
のこっている地域も
あるのよ

八行の音を調べると、
ことばの移り変わりの歴史
を感じますね



【編集部注】文化の中心地から離れたところに古い時代のことばが時間を追っての波紋状に遺るとい
うのは、柳田国男（1875～1962）が「蝸牛考」でカタツムリの方
言調査をもとに提唱した「方言
圏論」の理論です。